

小学校国語科における授業についての一考察：文学的な文章の読みを通して

著者	山? 淳
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	12
ページ	1-10
発行年	2022-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001669/

小学校国語科における授業についての一考察

～文学的な文章の読みを通して～

A Study of Learning Japanese in Elementary Schools
～ using Literary Texts in the Classroom ～

山 崎 淳^{*}
YAMAZAKI Atsushi

1 研究の目的

現行の学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）の方向性の根拠となった中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）に、次のような記述がある。

- 私たちは生涯にわたって学び続け、その成果を人生や社会の在り方に反映していく。そうした学びの本質を踏まえ、学習の基盤を支えるために必要な力とは何かを教科等を越えた視点で捉え、育んでいくことが重要となる。
- 様々な情報を理解して考えを形成し、文章等により表現していくために必要な読解力は、学習の基盤として時代を超えて常に重要なものであり、これからの時代においてもその重要性が変わることはない。第 1 章において指摘したように、情報化の進展の中でますます高まる読解力の重要性とは裏腹に、子供たちが教科書の文章すら読み解けていないのではないかとの問題提起もあるところであり、全ての基盤となる言語能力の育成を重視することが求められる。
- また、急速に情報化が進展する社会の中で、情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力、物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」）、統計的な分析に基づき判断する力、問題を見だし解決に向けて思考するために必要な知識やスキル（問題発見・解決能力）などを、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことの重要性は高まっていると考えられる。
- 加えて、これまで全ての教科等において重視されてきている体験活動や協働的な学習、見通しや振り返りといった学習活動も、それらを通じて、学習を充実させ社会生活で生きる重要な資質・能力が育まれているということを捉え直しながら、さらなる充実を図っていくことが求められる。

* 武蔵野大学教育学部

- このような、教科等の枠を越えてすべての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力についても、資質・能力の三つの柱に沿って整理し、教科等の関係や、教科等の枠を越えて共通に重視すべき学習活動との関係を明確にし、教育課程全体を見渡して組織的に取り組み、確実に育んでいくことができるようにすることが重要である。

(「第1部 第5章 何ができるようになるか—育成を目指す資質能力」より)

ここでは、言語能力、とりわけ読解力の重要性について述べられている。読解力については、以前は、単に文章を読んで理解する力と捉えられてきたが、OECD が実施する PISA において、読解力とは「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されて以降、文章のような連続型テキストだけでなく、図表のような非連続型テキストを読んで、その意味を理解する力も読解力と捉えられるようになった。

したがって、読解力を高める指導についても改善が求められている。これまで国語科における「読むこと」の学習においては、教材文を丁寧に読み、書かれていることを正確に（あたかも正解が一つであるように）理解することが重要とされてきた。そして、教師がかく読むべしと想定した読みをした児童のみが「読解力あり」とされてきたきらいがある。

一方、国語科指導法を学ぶ学生からは「教師があらかじめ正解としている読みに誘導するような指導でよいのか」、「よい読みと悪い読みの判断基準をどう持てばよいのか」、「読みに正解がないのだとしたら、子供の読みをどこまで認めたらよいのか」、「結局、どのように教えたらよいか分からない」といった声を多く聞く。

また、学研教育総合研究所が実施した調査（小学生白書 Web 版、2020 年 8 月調査）によると、国語科は嫌いな教科の 2 位である。本調査では、嫌いな理由までは言及されていないが、次のような理由が考えられる。「本は自由に読みたいのに、教科書だと正解を求められる」、「教師の期待する読みをしなければならない」、「どう読めばよいのか分からない」、「話合いは好きで、授業ではどんなことを言っても認められるのに、テストだと正解と不正解がある」などである。

学校教育で扱う以上、子どもたちに迎合する必要はないが、そうは言っても楽しく力が付くような指導を考えていく必要はあると考える。

本稿では、これまでの文学的文章の指導の課題を踏まえ、現行の学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」を基に、これからの文学的文章の「読むこと」の指導はどうあるべきかを探っていきたい。また、令和 3 年 1 月に公表された、中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』の内容も加味しつつ、指導のあり方を考えていくことにする。

2 これまでの文学的文章の指導の課題

かつては国語科教育＝文学教育と理解されるような時代があった。国語の時間は、文学作品をひたすら読み（なかには、一つの作品を 1 年間かけて読むというような指導もあった）、「この時の主人公の気持ちは？」、「この時思い浮かべることのできる情景は？」というような発問を重ねていったイメージがある。「気持ちばかり考えるので、気持ちが悪くなる」といった冗談交じり

の批判もあった。そして、「作者がこの作品を通じて一番言いたかったことは何か」という作品の主題や作者の意図を考えさせることも多かった。

このことについて、田近洵一氏（1993）は次のように述べている。

どんなに客観的・実証的に読んだとしても教師の〈読み〉が絶対だというわけにはいかない。研究者の〈読み〉がたえず塗りかえられてきたということは、ただ一つの正解の〈読み〉などというものがないことを物語っている。教師の〈読み〉はきわめて重要ではあるが、その点ではあくまで「私」の読みなのである。

たとえそれが絶対だとしても、すなわち、ただ一つの正解の〈読み〉というものがあり、それを到達点とし、すべての子どもの活動をそれに向けて合目的に組織するということは、個に即した多様な意味発見の可能性を子どもから奪うことになるだろう。

このことに関連して、例えば、学生に「ごんぎつね」（多くの教科書に掲載されている、小学校4年生の教材）の学習を通してどのようなことを学んだかを尋ねると、「気持ちのすれ違いが招いた悲惨な結末」、「口に出して言わないと気持ちは伝わらない」、「死んで初めてお互いを分かり合えた悲しい物語」など、主題に関わることを答える者が多かった。やはり、いわば「文学を教育する」という立場の教師から指導を受けてきた者が多いと思われる。また、一方で、「劇をした」、「朗読会をした」など、活動を覚えている学生もいた。いわゆるアクティブラーニング（このころは「体験的な活動」と称していたかもしれない）を取り入れた活動であったように推測される。しかしながら、「確かに『ごんぎつね』を読んだ記憶はあるが、何を学んだかは覚えていない」と答える学生もいる。これを、いい意味で解釈すると、コンテンツベースではなくコンピテンシーベースで、「文学で教育する」ことを通して無意識に言語能力が育成されたものの本人にはその自覚がない可能性が考えられる。しかし、悪い意味で解釈すると、学習した意味があまりなかったということになる。

以上をまとめると、これまでの文学的文章の指導については次のような課題があったと考えられる。

- ア 文学作品の内容価値の理解に偏重していたこと（言語能力の育成という視点が弱かったこと）
- イ 教師の読みに誘導するような傾向が見られたこと（多様な読みを認めるという考えとは裏腹に、最後は一つの読みにまとめようとする意識が強かったこと）

3 現行の学習指導要領が目指す文学的文章の指導

現行の学習指導要領が目指す指導を文学的文章の読みに限定してしまうと、矮小な論になってしまうおそれがあるので、ここでは現行の学習指導要領が目指す国語科の指導から考えていきたい。

平成28年12月21日に公表された、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について」には、次のような記載がある。

- 国語科においては、ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すため、現行（筆者注：旧）の学習指導要領に示されている学

習過程を改めて整理し、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域における学習活動の中で、三つの柱で整理した資質・能力がどのように働いているかを含めて図示した。

その際、言語能力の働く過程の整理を踏まえ、「認識から思考へ」という過程の中で働く理解するための力や、「思考から表現へ」という過程の中で働く表現するための力が、各領域の中で、主にどこで重点的に働いているのかを踏まえて示している。

- 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれの学習過程においても、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、すでに持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、すでに持っている考えの構造を転換する力」を働かせ、考えを形成し深めることが特に重要である。
- これらの一連の学習過程を実施する上では、整理された資質・能力の三つの柱のうち「学びに向かう力・人間性等」が大きな原動力となる。「学びに向かう力・人間性等」で挙げられている態度等が基盤となって、自ら次の学習活動に向かおうとする意識が生まれ、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の育成が図られる。また、これらの過程を意識的に行うことを通じて、より一層「学びに向かう力・人間性等」が育まれ、次の学習活動に向かう意欲が高まるなどの正の循環が見込まれる。
- 国語科においては、こうした学習活動は言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を通じて行われる必要がある。したがって、国語科で育成を目指す資質・能力の向上を図るためには、資質・能力が働く一連の学習過程をスパイラルに繰り返すとともに、一つ一つの学習活動において資質・能力の育成に応じた言語活動を充実することが重要である。

(「第2部 第2章 各教科・科目等の内容の見直し」より)

以上の内容をまとめると、理解力を高めるための指導においては、教師が「認識から思考へ」という目的意識を持つこと（つまり、教材を読むことによって、児童の思考の深化につなげるという意識を持つこと）が重要であり、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、すでに持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、すでに持っている考えの構造を転換する力」を児童一人一人にしっかりと付けさせることが重要であるといえる。そして、こうした学習活動を展開する際には、「学びに向かう力・人間性等」が重要であり、児童の学習意欲を高め、生かしていくような工夫が求められる。また、学んだことを社会や世界とかかわることに生かしたり、自分の生き方について考えたりすることにつなげていくことが重要であると考えられる。

こうしたことを踏まえて、文学的な文章の指導を考えていきたい。

まず重要なのは、教材に対する興味・関心を高めるということである。児童に教材に対する興味・関心を持たせるための手だてはいくつかある。

- ア 教材の内容に関連のある書籍や写真等を事前に児童の目にふれるような場所に用意しておく。
- イ 教材と同じ作者の作品を取り上げて事前に読み聞かせをするなど、作者や作品等に親しむ機会を設ける。

- ウ 教師が教材を十分に深く読み取り、その教材の内容や児童により影響を与えるであろう特色等について熟知しておく。また、教師自身がその教材を好きになる。
- エ その教材に取り上げられている内容や背景となっている事実に似たような経験があれば、そのことについて教師が紹介する。
- オ ア～エに共通することだが、教科書に掲載されているから指導するという意識ではなく、児童の言語能力を高めるために必要だからこの教材を使うという意識を教師が持つようにする。

次に重要なのは、指導観の転換である。よく「教科書を教えるのではなく、教科書で教えることが大切」といわれるが、指導の目的は作品を理解することではなく、作品を理解するために培った力を他の作品を読む際にも活用できるようにするということである。このことについて、二瓶弘行氏は「『自力読み』の力」とし、次のように述べている（2012）。

子どもたちに教えるべきは、作品のもつ内容価値ではない。教師の作品解釈でもない。正解として作品に存在するとされる主題でもない。

子どもが作品を自ら読み進め、自らの作品世界を創造するための「自力読み」の力である。

学習指導要領がコンテンツベースからコンピテンシーベースに転換したといわれる中、これからの文学的な文章の指導は、作品内容の解釈にとどまることなく、児童の読みの力を高めるものでありたい。

4 個別最適な学びと協働的な学びにおける文学的な文章の指導

令和3年1月26日に、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」が公表された。タイトルにもあるように、これからの学校教育においては、個別最適な学びと協働的な学びを両立させることが重要である。

本答申に述べられていることを文学的な文章の指導にどのように生かしていくべきかを考えていきたい。

上記答申において、個別最適な学びと協働的な学びに関して次のような記述がある。

- 全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。
- 基礎的・基本的な知識・技能や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。
- 以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」

- であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。
- これからの学校においては、(中略)カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに、(中略)個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。
 - さらに、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。
 - また、「協働的な学び」は、同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供との学び合いなども含むものである。(中略)子供が自らのこれまでの成長を振り返り、将来への展望を培うとともに、自己肯定感を育むなどの取組も大切である。
 - 学校における授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わせられて実現されていくことが多いと考えられる。各学校においては、教科等の特質に応じ、地域・学校や児童生徒の実情を踏まえながら、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。その際、家庭や地域の協力も得ながら人的・物的な体制を整え、教育活動を展開していくことも重要である。(後略)

(「第1部 3. 2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」より)

本答申では、「子供が自らの学習を調整する」といった文言が使われている。このことについて、答申の中には特段の説明はないが、「学習を調整する」とは、子どもが自ら課題を設定し、自分ができる解決方法を使って、自分のペースで解決するということだと考える。つまり、これまでも言われてきており、当然のことではあるが、「教師が指導する」という視点から「子どもが学ぶ」という視点への転換が重要だと考える。「主体的・対話的で深い学び」の「主体的な学び」に直結する部分である。

この考え方を国語科の文学的な文章の読みに当てはめて考えると、教材に出会った当初の驚きや感動を大切に、疑問や着目すべき点を児童が見つけ、これまで学んできた(あるいは教師の助言による)方法を活用して、教材を読み深めていくということである。

そのために教師がやるべきことは、次の点である。

(1) 徹底した教材研究を行う

「総合的な学習の時間」の学習においては、児童自らが課題を見つけ、その課題を解決する活動を重視する。しかし、そうは言っても、全てを児童任せにしているわけではない。課題を設定する際においても、課題を解決する際においても、課題を解決した結果を発表する際においても、教師の役割は重要である。児童の思いや意図を汲み、適切な助言を行うことが求められる。そのためには、児童が取り組みたい課題に対してある程度の造詣を深めておくことが必要である。そ

して、解決方法や発表方法についても、様々な方法を熟知していることが求められる。

それは文学的な文章の読みにおいても同様だと考える。児童主体の学習を構想するためには、教師が教材や作者について深く知ることが必要である。深く知るのは一方的に教えるためではない。児童が様々な読みをしたときに、それを受容し、肯定するためである。もちろん、児童の読みを否定せざるを得ない場合もあると考えられるが、そのための根拠を示すためでもある。

また、徹底した教材研究を行うことで重要なことは、教師がその教材を好きになるということである。教師が教材を好きになり、面白いと思えるようにならなければ、児童に教材の魅力を伝えることもできず、また、興味・関心をもたせることも難しいと考える。

(2) 教科内容を深く理解する

国語科教育は言語の教育といわれている。文学的な文章を読み、その内容価値にふれ、人間性を深めることはもちろん重要であるが、読む活動を通して言語能力を高めることが重要である。また、そうした国語科教育のねらいや文学的な文章を読む意義を十分に把握することが重要である。このため、教科の目標や内容をしっかりと把握するとともに、文学教育理論にはどのようなものがあるか、文学的な文章の指導法にはどのようなものがあるか、などについて深く広く知っておく必要がある。

(3) 学習者に対する理解を深める

学習活動は、学習者、指導者、教材の三者で成り立っているといわれている。全ての教科学習において言えることだが、教師は児童の現在の学力や学習状況についてしっかりと理解しておくことが求められる。また、どのようなことに興味・関心を持っているのか、どのような学習方法が身に付いているのかなどについて、一人一人の児童の状況について理解することが重要である。先に紹介した、令和3年1月の中央教育審議会答申にも「子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの『指導の個別化』が必要である。」と述べられている。また、同答申では「教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する『学習の個性化』も必要である。」とも述べられている。

以上の考え方を文学的な文章の読みに当てはめると、小学校6年間の中で身に付けさせるべき読みの力を明らかにし、現在どの程度、どのように身に付いているのかを、一人一人の児童について把握し、個に応じた学習が進むよう、教師がその手だてを考える必要がある。そして、児童自身が自ら学習計画を立て、課題解決に向けて読みを進めていけるよう、教師は適切な支援をする必要がある。

(4) 言語能力の分析を行う

文学的な文章を読む際に必要な言語能力にはどのようなものがあるかについて、教師は十分に理解していなければならない。

先に述べたように、平成28年12月の中央教育審議会答申において、「教科書の文章すら読み解けていないのではないかとの問題提起もあるところであり、全ての基盤となる言語能力の育成を重視することが求められる。」とあるように、教師は児童に身に付けさせるべき言語能力について十分理解しておく必要がある。

現行の学習指導要領で「情報の扱い方に関する事項」が新設された。その中で、「情報と情報

との関係」では、「共通、相違、順序、理由、因果」等が挙げられている。また、「情報の整理」では、「比較、分類、引用、関係づけ」等が挙げられている。これらの力を駆使して、文章を読み解いていくことが重要である。

5 指導の実際（学習指導例）

これまで述べてきた内容をもとに、学習指導例を考えてみたい。「個別最適な学び」を進めるためには、教材を限定するべきではない、あるいは、個々の児童にふさわしい教材を用意すべきという考え方もあろうかと思うが、ここでは、現実的な対応として教科書に掲載されている教材を共通教材として取り上げる。

○第5学年の指導例（単元指導計画）

(1) 単元名 「お気に入りの表現についての意見交換会をしよう」

（教材名『大造じいさんとがん』）

(2) 単元設定の理由（省略）

(3) 単元の目標

- ・ 思考に関わる語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語句を豊かにすることができる。
- ・ 人物像や物語の全体像を言葉を手がかりに具体的に想像したり、表現の効果を考えたりして、お気に入りの表現を見つけることができる。
- ・ 自分が見つけたお気に入りの表現について、その理由や素晴らしさ等についてお互いに分かりやすく伝え合おうとする。

(4) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
思考に関わる語句の量を増やし、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。	人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりして、お気に入りの表現を見つけている。	残雪に対する大造じいさんの心情や情景についての表現の素晴らしさを、お気に入りの表現としてお互いに分かりやすく伝え合おうとしている。

(5) 単元の指導計画（全7時間）

時	○主な学習活動 ・指導事項	※指導上の留意点 ☆評価規準
0	○学習に対する興味・関心を高める。	※昔の猟師の仕事に関する本、鳥類図鑑、椋鳩十の作品等を教室内に置いておく。 ※動物の行動に人間性を感じたような経験（忠犬ハチ公のようなエピソード）を児童に話す。
1	○学習の見通しをもつ。 ・全文を通読し、初発の感想を書く。	※全文を通読し、疑問や気になった点、気に入った表現等をピックアップさせる。お気に入りの表現は人それぞれであるので、友達のお気に入りの表現を知りたい、そのために、お気に入りの表現について伝え合いたいという気持ちを高め、単元全体の見通しをもたせる。
2 ・ 3	○大造じいさんの残雪に対する心情の変化を考える。	※心情の指摘とともに、なぜそのような心情に至ったのかについても考えられるようにする。 ※一つの場面でも、残雪の動きによって、大造じいさんの心情が移り変わることもある。大造じいさんの性格や前後の状況を踏まえて具体的に想像するようにさせる。 ☆人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりして、お気に入りの表現を見つけている。
4	○お気に入りの表現を見つける。	※美しい表現、心情を見事に表している表現、情景を分かりやすく表している表現等、自分なりの観点でお気に入りの表現を見つけさせる。

5	○同じお気に入りの表現を見つけた児童どうして、表現の素晴らしさについて議論し、さらに明確な理由付けをする。	※理由を話し合ったりノートにまとめさせたりすることにより、自分なりの根拠をはっきりさせる。 ☆思考に関わる語句の量を増やし、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。
6	○自分のお気に入りの表現と気に入った理由について発表できるよう準備する。	※発表方法については、児童が得意とする方法や効果的だと思う方法など、児童一人一人に選ばせる。 ※発表方法を思いつかない児童に対しては、教師が助言を行う。
7	○お気に入りの表現についての意見交換会を行う。	※気に入った理由、その表現からどのような心情や情景が想像できるかなどについて発表させる。 ※友達の発表を聞いて（あるいは見て）、どのような感想を持ったか、まとめさせる。 ☆残雪に対する大造じいさんの心情や情景についての表現の素晴らしさを、お気に入りの表現としてお互いに分かりやすく伝え合おうとしている。

(6) 本時の指導（省略）

6 まとめ

生涯を通じて国語教育の発展に尽力された大村はま先生は、戦後、それまでの高等女学校から新制中学校の教師に転任され、江東区の中学校に着任されたとき、教室も教材も何もかもが不足している中で、どのように指導してよいか途方に暮れた後、生徒一人一人に異なる教材を用意したところ、それまで騒がしかった生徒も夢中になって学習に取り組んだというエピソードを残されている。そして、夢中になって学ぶ生徒の姿を見て、生徒の学ぼうという気持ちを生かせず、教室が騒がしくなるのは、ひとえに教師の責任なのだと述べられている。それから 75 年ほどが経過しているが、大村先生の実践は、まさに「個別最適な学び」であったといえよう。

令和 3 年 1 月の中教審答申を待つまでもなく、大村先生以来「個別最適な学び」を実践されてきた方は多数いらっしゃると思うが、それがなかなか定着しないのは、理念は理解できても「個別最適な学び」を実際に行うことは極めて困難であるからだと考える。児童一人一人の興味・関心に応じるとともに、一人一人異なるめあてを設定して適切な言語能力を身に付けさせることは至難の業である。完璧に「個別最適な学び」を実現しようとする と挫折してしまうおそれがある。

そこで、今の指導よりも少しでも「個別最適な学び」にするにはどうしたらよいかを意識するとよいと考える。本稿で取り上げた指導例も大向こうを唸らせるようなものではない。しかし、「0 時」を設定したり、課題に対する答えを一人一人の意思に基づいて考えさせたりするところを工夫したと考えている。

いずれにしても、これまでの正解を求めるような文学的な文章を読む指導からは脱却しなければならぬ。一人一人の読みが尊重され、お互いの読みに対して活発な議論ができるような教室に変容していくことを期待している。

(参考文献)

- (1) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編」文部科学省、2017年7月
- (2) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について」2016年12月
- (3) 中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」2021年1月
- (4) 大村はま著「教えるということ」共文社、1973年11月
- (5) 田近洵一著「読み手をそだてる－読者論から読書行為論へ」明治図書出版、1993年10月
- (6) 二瓶弘行著「二瓶弘行の物語授業 教材研究の条件」東洋館出版社、2012年2月
- (7) 二瓶弘行著「最高の『言葉の力』を育む国語科単元づくり」東洋館出版社、2016年8月
- (8) 日本国語教育学会「月刊 国語教育研究」2019年5月号 特集「新しい時代に対応する教材研究」
- (9) 日本国語教育学会「月刊 国語教育研究」2020年9月号 特集「多面的な見方・考え方を育てる『読むこと』の指導」
- (10) 日本国語教育学会「月刊 国語教育研究」2021年4月号 特集「学習者が学びを実感する国語単元学習」
- (11) 日本国語教育学会「月刊 国語教育研究」2021年9月号 特集「多様な教材を活用した『読むこと』の指導」
- (12) 学研教育総合研究所「小学生白書 Web版（2020年8月調査）小学生の日常生活・学習・新型コロナ対策の休校に関する調査」
(<https://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/whitepaper/202008/index.html> 2021年9月14日閲覧)